

# 親父が認知症に!?

## 平藤清刀さんの介護体験記 #12

■父は息子を認識できなくなっていた

体力が戻り、病棟内をウロウロ歩き回るようになった父。本来ならば喜ばしいことですが、今度はそれが看護にあたるスタッフや医師の手を煩わせることになっていきました。なぜなら歩き回れるようになったことで、しばしばベッドに蹴躓いて転倒することがあり、

本人はともかく、他の入院患者やスタッフに迷惑がかかってしまうので、私は「必要ならば縛着でも固定でもなんでもしてください」と答えておきました。

現に頭を打ってケガをしたり肋骨を折ったりしていました。そのたびに病院から報告を受け、「安全のための措置としてベッドに縛着してもよろしいですか」と許可を求められるのでした。

父はすでに「要介護4」の認定を受けていましたが、入院生活で介護保険を使う機会はありませんでした。

とところでこの病院では、入院費の支払いで銀行振り込みを受け付けていません。現金を直接持って行くか、現金書留で送らなければなりませんでした。これには理由があります。認知症を患って持

て余した家族が、さながら姥捨て山の如く見捨ててしまうケースが少なくないとのこと。ですから、せめて月に一度は病院まで足を運ばざるを得ないように、あるいは思い出さざるを得ないように、お手軽な振り込みを受け付けていないのです。

私も月に一度、支払いのために病院を訪れました。ただ様子を見て帰るだけ。見舞いといっても、父がもう私のことを認識できなくなっていたので会話もできず、生存確認をして母に報告するのが私の役目になっていました。

(次回に続く)